

### 3 異なる家きんの HPAI 発生時の防疫対応

熊谷家畜保健衛生所

○松田 友紀野・木下 眞大樹

#### I はじめに

令和 4 年度、埼玉県内では 4 例の高病原性鳥インフルエンザ（以下：HP AI）が発生した。

1 例目は深谷市で採卵鶏約 19 万羽、  
2 例目は狭山市で採卵鶏約 11 万 6 千羽、  
3 例目は行田市であひる約 2 千羽  
4 例目は日高市でうずら約 14 万 9 千羽を殺処分した（図 1）。今回、異なる

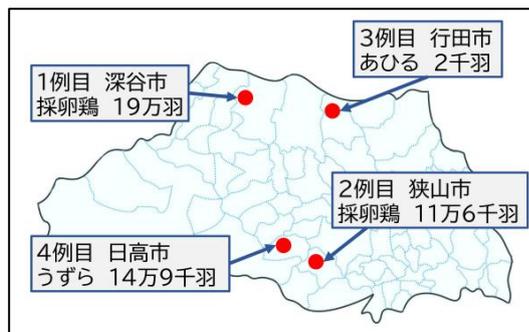


図 1：県内の発生状況

異なる家きん種の飼養形態に応じて迅速な殺処分作業を行ったので、その概要を報告する。

#### II 採卵鶏における防疫対応

##### 1 発生農場の概要

1 例目は令和 4 年 12 月 17 日に発生した。鶏舎構造は高床式開放鶏舎、鶏舎数は 10 棟、ケージの構造は 3 段ケージであった。  
2 例目は令和 4 年 12 月 30 日に発生した。鶏舎構造は開放鶏舎、鶏舎数は 8 棟うち 1 棟は二階で、ケージの構造は 2~7 段ケージであった。



図 2：鶏舎内通路の様子

##### 2 作業における課題

採卵鶏 2 農場の殺処分作業で 3 つの問題が生じた。

1 つ目は、鶏舎内の通路が狭かったことである（図 2）。ニワトリを投入したポリペールを台車で搬出する従来の方法では、通路内における台車のすれ違いが困難等の理由から、捕鳥や搬出作業が停滞すると判断した。そこで、捕鳥にガラ袋を使用することとした。捕鳥後のガラ袋を通路に仮置きすることで、継続的な捕鳥作業が可能と



図 3：通路に仮置きしたガラ袋

なった(図 3)。また、補鳥後のガラ袋の搬出にかご台車等を使用したことで、一度に多くのガラ袋を運ぶことができ、搬出作業の効率も上がった(図 4)。ガラ袋への鶏投入には、プラスチック段ボール製シューター(以下プラダンシューター)を使用した。プラダンシューターは市販のプラスチック段ボールを四角に折り曲げて、つなぎ目をテープでとめて作成した。プラダンシューターをガラ袋に差し込み、2人1組で補鳥作業を行った(図 5)。ガラ袋1つにニワトリを5羽入れ、その後ガラ袋の口を結束バンドで縛った。プラダンシューターの使用により、ガラ袋にニワトリの爪が絡まることがなくなり、効率良く補鳥作業を行えるようになった。

2つ目は、鶏舎出入り口付近のスペースが狭かったことである。従来、殺処分作業は鶏舎出入り口付近で行っていた。しかし、補鳥方法を見直したことにより搬出が効率化し、鶏舎出入口付近にガラ袋の滞留がおこると想定された。これにより、さらに入入り口付近のスペースがなくなり、出入り口付近での殺処分作業は困難になると判断した。そこで、鶏舎外にある広いスペースでの殺処分することとした。殺処分スペースへのガラ袋運搬には、軽トラックを使用した。(図 6)。ガラ袋に捕鳥していたことで、鶏舎外での運搬作業が容易に行えた。また、軽トラックは、一度に40袋のガラ袋を運搬でき、運搬効率も上昇した。

3つ目は、高床式鶏舎や二階建て鶏舎だったことである。2階開口部からのガラ袋の搬出は、作業開始当初フォークリフトを使用していた。しかし、この方法では投入者の作業負担が大きく作業効率が悪か

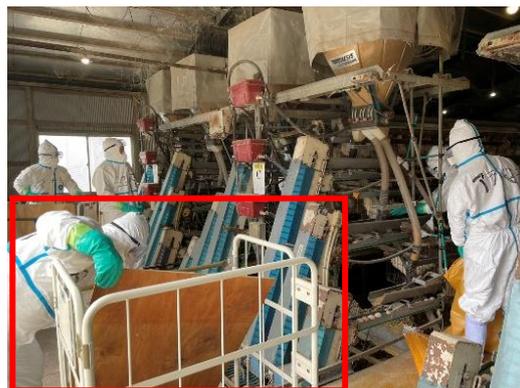


図 4: かご台車を使用した搬出



図 5: プラダンシューターによる捕鳥の様子



図 6: 軽トラックによるガラ袋の運搬

った。また、高所からガラ袋や作業従事者が地上に落下する可能性もあり、危険な作業だった。そこで、建設業協会のアドバイスをもとに、コンクリートシューターを使用した搬出方法へ見直しをした(図 7)。2 階開口部から地上部の軽トラックに向けてコンクリートシューターを設置し、ガラ袋を滑り落とした。コンクリートシューターを使用したことで、作業従事者の負担が軽減される等、安全かつ効率的な作業となった。



図 7: コンクリートシューターによる高所部からの搬出

### III あひるにおける防疫対応

#### 1 発生農場の概要

3 例目は令和 5 年 1 月 26 日、あひる農場で発生した。

畜舎構造は開放平飼い家きん舎、畜舎数は 3 棟(雛舎 1 棟、育成舎 2 棟)だった。

#### 2 あひるの殺処分作業

あひるの幼雛の殺処分は、可動式の囲みを狭めることで幼雛を集め、手箕ですくい密閉容器に投入した(図 8 左)。次に、中雛及び大雛の殺処分は、畜主のアドバイスにより出荷時同様に畜舎隅のスペースにあひるを



密閉容器に入れた幼雛



大雛の追い込み

追い込み仕切りで囲み(図 8 右)、囲みの中のあひるを捕まえてフレコンバックに投入した。その後、すべてガス殺し埋却した。

図 8: あひるの殺処分方法

### IV うずらにおける防疫対応

#### 1 発生農場の概要

4 例目は令和 5 年 2 月 1 日、うずら農場で発生した。

畜舎構造はセミウィンドウレス鶉舎、畜舎雛は 3 棟(育雛舎 1 棟、鶉舎 2 棟)で 2~10 段ケージだった。

#### 2 うずらの殺処分作業

うずらの殺処分は全鶉舎のケージが取り外し可能だったので、ケージごと取り外し台車で畜舎外へ搬出した(図 9 左)。畜舎出口から殺処分場所までは軽トラックに乗せ換え

運搬した。殺処分場所でケージの取り出し口を開けうずらをフレコンバッグに投入後、ガス殺し埋却した(図 9 右)。



台車に乗せたケージ フレコンバッグへ投入

図 9：うずらの殺処分方法

VI まとめ

令和 4 年度に埼玉県内では 4 例の HPAI が発生し、総殺処分羽数は約 46 万羽となった。HPAI の特定家畜伝染病防疫指針における採卵鶏 24 時間当たりの殺処分羽数の目は 3~6 万羽である。今回防疫措置を行った採卵鶏 2 農場の 24 時間当たりの殺処分羽数は約 3 万 7 千羽と国の目安に収まっている(表 1)。また、あひる及びうずらにおいても、24 時間以内に殺処分が完了しており、迅速な殺処分作業が実施できた。

表 1：各農場の殺処分羽数・時間、24 時間あたりの殺処分羽数

	殺処分羽数	殺処分時間	24時間あたりの殺処分羽数
①深谷市(採卵鶏)	19万羽	123時間	37千羽
②狭山市(採卵鶏)	11.6万羽	74時間	37.6千羽
③行田市(あひる)	2千羽	1時間	—
④日高市(うずら)	14.9万羽	11時間	—

家きんの種類や農場構造の違いにより、殺処分作業の方法は異なるが、家畜伝染病発生時には迅速な防疫対応により、蔓延防止及び早期収束を図ることが重要となる。円滑な防疫作業を行うためには、速やかに発生農場の情報を把握し防疫計画を立てる必要がある。今後は、事前に県内農場情報を把握、共有するため 360 度動画撮影等、家畜衛生関連情報共有システムの拡充を図りたいと考える。また、今回の防疫措置において、高所からの搬出方法やあひるの捕鳥方法など関係者からのアドバイスは防疫作業効率を大幅に上げた。今後も防疫措置体制強化のため、各種関係者との連携強化に努めていきたい。